葉乃傳

二

イ 5
67
2

雜考之二

同録

○山為て大地を埋む

○女夫石乃記

○安藝國陰陽石付 備前長船石 摂津國 [illegible]

○武蔵国厚岸玉石

○遠江國袋井玉付 駿河國玉石

○尾張名古屋城大しゃち

○日數田祢宮門之事

曽1
門 5
雑 67
巻 2

○日長久る丹羽左兵衛尉が女
○鎌とかうんとらの因縁
○嚴明寺厳廻國
○吾妻の乃言語
○婦家女自宮分逢女家女ゆし坊婦世
○を見掛川嬪ゞ田
○江戸別保村浄元会
○三好実休滅亡分浄瑠璃左変風場

筆の伝 巻之二

○前篇百く大地乃泥紙筆て出さまとり思ふ巳と元
より人の得る紙使よ多くい見し人出よ形ふて潮岐等
乃後よ甚蛇の形象毛姫を宿語を実よ蛇ゞ毒気紙
ふまく形よやよろ山中松人ゞ根代していまゞ山出し
せざる木よ約ろり蛇とを木の効きたるよ髪元怖ろや
と未実ろ事用あり又深山幽谷よ大蛇数ゞ年経て
海中へ出るものなりとふ人あり又根元象根山其外
深ふより鉈背ろ出る医象象伝ゞ深ゞ法木
乃象象寄りて数年ゞ後出ゞよ化して蛇背となる元

浜山乃地震ニ崩れ欠る所ハ中山ハ形ハ移り曲りて
乃ち人ニ其の蛇背と唱へる俗説しとなり此蛇
背れ説ニ似る事あり天正年中ハ事ハ駿河國
志太郡ハ山市柔郷山とふ村ハ大井川の上流なる数ハ年を
経る大蛇海ニ出んと欲し先大井川ニ出ひ吸て
流を堰止しかば川上六里余ハ湛へ出るを
待て海へ出るを示さんとあやうきあれいとりひ
たすらて大山崩れ落て大蛇を埋む其後ニ去るを
大蛇乃白背ハ出しニ口とおやしき所ニ入て紙
伸しなるニ潮上聞ニ速くニ背ニ

て山畑乃麻畑ニ絡ひ胴背ハ擦潰を春白ニ居家番
腹の臍差と四ツが年く法方へ執去しかば今い垣も
臍差も云ハ人多ハ
稀なり適ニ油ハ潰るを物乃ハ多
ありて彼蛇の油なりとけづりて切疵ニ付る
を此此ハ紙ハ
縫うしニ泉後刺ハ
自然ニ去ニ油の潰るを
薩乳乃汁ハ
もの名ん蛇乃大ニ押埋らるとを虚説

なられんと称せられまてうり

此大井川を駿河と遠江両国の間より南へ流れ

なる大河なれ社古より国境とを大井川とも古記に

見へたり駿河乃人い冨士川阿部川大井川三つの

後流ある故に国ゝ号とを駿河の大井川なりと

いふを江乃人の曰流水を汲て川と云汲方ゝ国ゝ

属を称まべきを江乃川なり

日本記曰仁徳天皇六十二年夏五月遠江国司

表上言有大樹自大井河流之停于河曲其大十

圍幸一以来両時遣倭直吾子籠令造船而自南

海運之將来于難波津以充御船也

かくれでゝ乃澄あるとゝ世上に国境とゝ人が東

西乃堤より川系の内を附ゝ川側ゝよるべし

堤の川なれバどゝ乃属をべし我国ゝ川と

見むとも何の用ゝ乃ん往来旅人乃難義を慮

まべ川の如ゝ国ゝ蓋なし百日ゝ旱ゝもも

涸ざる大河なまバ俗ゝいふ掛塩なるべし

○毛奉大井川より出る男根ゝ似ゝる石世上ゝ弄ぶ

余ある射此川系ゝ於んで陰陽二つ乃石紙ひろひ

自見翁ゝ縋る翁乃真ゝ需るゝ陰乃色俚俗紙

設て彼矣を

女夫石乃記

凡天地陰陽乃二気より産まれて生るもの悉く雌
雄乃象を形を中より比翼を翅をかはし鴛鴦より
金銀鳥をみるに何乃根より尾を備て猶疫や
もらんと名を異にして姿は雌雄あり牡丹乃
射干乃菖蒲より花より菖蒲乃似るも梅乃足
より接乃婦婿なる松を相生は夫婦より女竹男竹
の並は茶をみぐるまもとれい酒とるとも雌雄なり
なりまてば因より前後乃甲乙なきべ後河三河雌雄

とて都より名れ波海や吾妻い生れは因より大井
川のなまあり義世乃石は敷も及べしと阿佛乃
尼乃言は茶もゆうしくある日岩川乃東より道遥
せしより怪しきなる紙拾ひはこう一ツい雌の形一ツを
雄の湾とてあらど獣とあらど男雑陰戸の二ツ
掌より並て見をるより埴うり宴より三河乃因より川乃
名なりより林自見翁より余莫逆の友なきべ見紙綿う
て荘年は芸気を徑さんりのをやと一章を紙し
老乃矣ひを添る年となりぬ

あるうまし花乃石は肌さうり

于時宝暦甲申三月

○安藝と備後の國境田村中より自然石の男根陰戸
の姿男根は備後陰戸は安藝の國に属ととつふ
常陸國弓解乃浦乃宮にをいの國幸村住の社乃
神体など往古より有あるこなるべし
備前國長船は古代より刀剣乃産地にあるとて
今も甚多孫彫終なし人殺槌紙用ひだ槌に用
ゐるこに自然よりて首より山中へ入く大槌一本
中用ゆべき程で拾ひ来るとなん
又伊勢國鈴鹿郡とつふ世とよ鈴くるこなり用國

孤郡より出て人こ炭薪を三河國る伝
村乃山乃人農家村女摘茶に出りよ伝ふりあるもと
ゆるうだやなどつふよ面よりも用しくかつらば
中く美人乃多大よ髪乃垂れ長るそとより来てもむし
若若三味線弾など習ひて風ひ踊るよ田方より
つふより二際面白く雲れ風ふ孤郡乃ふより鈴鹿
甚よ多しとて伝ふもなく鈴鹿乃とりてそやを
二三ヶ年引来れ事なり
○武乃河越乃高家西村寺乃とふ出炭薪とる和
二三艘よにてそれ郡より西を附る往乃大川より壱里

わど川と厚が関とらんに有へ給宮人貴賤うる側なる
ようひたすらを側乃多うと右れ不思うしるねがと
乃事なるぶ側ようを所ゆどゆれ為と何やらん
光輝くあるを見分て常よりも数事をうれるなれば
あ絲の君一表繋れ入かの考る物紙えあげるまとば
天に方往れまてを冠くーを絲人きく面向不肖の玉
もかくやとうるまとうる石れをうす白くしてるの
みいろかりえあげて後我えん人えんと幸ふかどよ
紅をあるさそうまてくく三所だうう流をうを所そ
玉紙るを拾くるあを冠所登縁じて不用なりとそえあ

中へ捨ゆう此事を紅を事紙使けく言語同断
乃芝ぐるかりうを水絲紙撰をか乃玉紙捨くる玉
へ約て二をびえあげ掬玉をび主系れ者ゆあづけ
彼人よも望くるるを云会ゆ二三日中う
江都へ出くれ事ーて河越へえる紅ども江都へ云
て後新紅乃長を湯をふりの此玉紙今一度乃石よ
うと絲義かくーえびさ乃をいるをを為ーて
おーー乃色ゆをよ能くーる絲うを主中何方やらん
おゆ乃色なをびニ三日備たを人び新て西をべーと
ーを是肥をくを来るをーを勢紅長を湯を

日ゝてかの西人約此はなまゑも何越より来り
さんく所て此者共後日ゝ何某屋へ参り西後
ゐてはべしあまとてゐよ何某屋乃作よい拭ゐ家
既失乃びてかく此五拭ふりのよあらど大老中へ
差とこう二三日よい西とべしとて他人を頼り拭法
ゐ延宝又年に月紙朱よ後う也何某屋へ約こうゐ
を西共今ゐ大老何ゞ屋よありて元ゐ人を来
かりがゝと来此ゐ演説あり西いまゐ来も
吹ゐて何越へ参りゐ其後ふとあまゐ此宝庫
よ納りゐるとぞ

遠江国芝田郷百古里村ゐ百姓武兵衛乃女茶屋
よ出く搗ゐよ何とゐく夕日暎して其ゐ
かゐ所あり元ゐう烟乃臨一二寸ゐを穿乃ゐよ
印ゐぐかゐ美しきゐあり元てゐう来よゐ也と
帯とよゐ亜毛角して日も暮ゐう一町ゐうゐを所の
義経よ鬼所乃家あり不外実よ来りいよ君若狭ゐ
此家内ゐ乃ゐよ燈いゐと挑ぐゐよ甚光ゐあいゐ屋
うあると易ゐ道び向よかくけぐくゐ乃ゐ指ひて屋素よ
及びど怪しゐ怪とゐうゐよ書よ動ゐども灯ゐ点ゐ
て国人ゐ乃ゐ此ゐ此光ゐるかゐと見ゐ也ゐれば鬼頻よ不安

去て市兵衛あるあり金百疋を拾出して五貫拾還る夫婦
ともろひとりれ金銭なく暫く考ひ時に翌日
乃夜半被賊家に出火ありて法乗を焼失なり
を出て走ひ乃里代笠をうて里代者狂して曰
他人きく夜光れ物ありて俚民れ家に近ちど共五
れ盛に壓きくれる大雑に遭ふあや又雷雨とを
大精れ凝るりのなれど彼珠より大出ちうやうを不測
乃果なり元文乃比の事なりとや
又はじ比駿河国伊豆国里代農人ある村
次遠ちて見べき石拾ふ是も鎮印ぐあり行部

乃まなれば何とふりのと人に見とる石もなく焼び
ある拾佛の角に入来ち夜ひうりあり焼ぬ村で
くなれば怪敵りのとだうあんてを石れ人とくも
何石もなく不思議ことどある村共村乃長地蔵へ
面用ありて出るに方に活れ寿に此石れ事を語
中役人笠くかを行く用り乃寿に拾来ちと会
ちまに安くとと結合て狂なく此石偽り来り
て下国に渡を下国を五郎れ大よりとび重行て
屋とべ光ちべ光ちべくあづうとて石迄一主後
二度此五乃事を云ど行に里れ長なれば役人乃

感ゝ恐懼して此方よりも同じかりね
接名孫名玉い爰人る後乃徳氏感じて出生
さるかりんう為陸乃大爰の村此玉能紛して
駿河山中ゝ通りゝ人を地阪乃下引れるより
伝れ方へ飛なるべし
元禄元庚辰六月尾張名古屋廣小路ゝ出爰あり
ゝて皆駭ゝ出大るく只烟のみ有びあらし
くゝよりくゝ見び烟ゝ出あらで蝦いうかとゝるく
集りるサ三日ゝありくゝ烟のごとくゝ又ゝ出なり是蝦
だらとらゝのかり然ゝとゝ此蝦爰事い未

爰事かり暫大ゝ怒動口ゝゝ
○月比尾張藩田神寺門を建るゝて地紙場て地
築ゝ明る地紙ゝ尺あり掘ゝゝ去れ中義ゝ
て人足ゝ不思議ゝ出れ乃ちゝ反起せば
去中ゝ鳥狂乃る蛤出てづくゝゝるく翻紛
ゝるりゝれゝ日ゝ狂物友ゝらるゝゝ
○尾張長久ゝ丞水戸ゝ前ゝ旁ゝ女長久ゝ陳の村三十八
歳ゝ此女長命ゝて百又十歳命ゝて左命ゝ元禄
十年尾張君へ長石其ゝ此事ゝ出明ゝ雲の陳中
ゝて命事紙燈ゝ丹ゝ人ゝ此事ゝ一向ゝ人ゝど

とるりうくるれ純根よあらどび是ゐど長命よを
あらぎるべし
○鎌倉かちんとうをむう〜旅因法師が雨乞れうとう
よりく武人ようびを鎌と拝餐〜ゐるより歌笑と
ゑと世俗能ゐう意仁孔後ゑ武義教の府猖を
宿教と云てる男大内繁地れあうと鎌と奏あうく
大内女帝鎌とうぶをつや〜きうてかちんをゑ〜
ようれ幸かうとぞ
○嚴明寺府和色國の府雑波と寡婦ゞ紅よ正宿ゆう
る寡婦ゐ等紙一紙よ押紙ゆうを〜夫紙信ゐ府和

佛壹れ伝牌乃素よ一貫紙ゆうをおき帰國後幸紙
安坊さゆらをとうう
雑波ゞと閑干よをき月うけゆ
ゆとうれ
似〜時和色國れ寺い北条九代紀よのゆとうとう久
ゞも東鏡名れ実孫よ久ゞど色國使と自微紙と
称ゞるゑらんとうへう
ある府秀吉ゑ謂渚將曰北条時和ゑ其外天下れ執
権として抖擻紙聴〜法花と周流〜感れ然葬
を敷ゑうとふ人ゑ一代名ゑ末代ゑを尼我久時和ゞ

先誕を遂て法國を巡回せんと云々法師皆共を了て
来紙器を捧て答へるりのみ〜而田玄意の曰此の證
拠なしとるもど孫文君を大名をいふ者なる狡
猾者あつく変あらんも彼〜此者佐を恵あつく法
ろべ〜と云上を奏ち云曰日本い我掌極よあり何
ど我よ欲をる者あらんやとひて奏弾後を孫爭
をる者なる〜一夜日るだ泉石堤朝師扶本表ち
と云者あり此者清藝れ経にたる〜れとるて秀
吉れ法意よ入て名よるを此る拘病をして久て来
ちあ今日登城〜公よ猶を公曰何も法愛るかるれを

市易ある者たちつ百此る行脚乃事にて何長極まる光
乃清正勅ろ人系清仕ち為く形じちち大きか紙
花泉ち乃〜夜鞘徒あ居ん委花泉乃根ち大二丈ち
れ遠鼓悪毛出現〜拘て我をはまを為く引裂喰ん
ち事府石向毛曰い〜じて足下よ欲ちんや猶る我を
生貧奇怪れ事ち乃乃紙ねむ今足下乃大ち清紙
乃ちまを〜れ死ちを事情ちまを〜ち人一度ち れ清よ
義〜乃名ち人事ちて公法ちよ〜なまちを〜れば
か乃毛吉かりちて急ち清矢小き掃于と化〜我
為よ来る紙是をちりて日よ八吹咽脱〜ねまを毛も

けくけり殷虎口帰宅仕うりとゝ云ふを皆大笑し
大けり霞後けりとあざけり返出と翌日公謂弦將曰
昨日表方の義尾いぶ笑てゝ弱問せる皆唯涙をゝ
若臣公曰奴面吾幼脚乃妻紙ぶんとの体爭けり藥が
謂ぶく我威勢怖畏ぶ多の臣夫二夫乃器れてし
云ふとも胚使乃子とせつくてい服せらまきじきよ
もあらず左けり後之絶幼の妻出ぶ〜とあつく
還らまし〜とるり弦將曰嘲人ぶり笑人ぶ上ふとゝ
後〜ふるとるり
似〜表ふり後坂内宗拾と号を自製とる鞘褐合よく

子と納りよとろうと間友吾呂利と自負と此去能云よ
て又香乃孔逢人けり此去孔知る病を弱問とゝて秀吉
ふりうと役をふらる共ゝ宅ゝ入なまくとゝ人ども意深も也
ど卯ゝぶり合業〜て曰大病に〜て落命旦夕よあり
所仮冥うてゝ人ども冥途一住用あらば作ゝらまゝ名ふよ
作ふらまゝ下さまゝ云ふとゝて御果ふり今増乃とゝ孔で腔に
ふりゝうとゝて秀吉云落涙あり〜とるり
○寛永中据何某及孔旁猴乃娘お六ふゝ〜い和中乃
尤をとゝゝいゝ人乃素ふり一男子生ふゝ人ども姑の
後よりて古い自害と素永ゝれば賠と書置孔中よ

みづから入て此世ハ閑いとも暫ク死ハ猶ハいざ月と又ん
幽斎院師長卿法華経乃比丘尼なり居しが浄土の時
聖衆よ琵琶一面与へなん彼斎離別を惜しと測よ身
を投げと其時一首乃和歌と詠ど
にハ此絵のさらべよかけて三つ際川流と果しと若よ法よ
是より其家を琵琶宗とうつ
中比ハ宗乃金屋よ宋女とうつ於女ありある俗此女帝
よ添く乃ハ色ひいろうと乃金やハ乃紅あやしこと乃
なく美人多とべとうく云絵して金せざりしべ此俗乃ひよ
ほうよ自害して墨ぬ宋女此ハ物絵笑ていどして絵を出

久ん続ぐ池よ身を投て死と藤世
石紙とハ知ぬ波よ猿沢ハ絵と続ぐ池よ流めば
元孫安永乃比雑波乃俳よかしく坊として異風ハ乃
ハ者ありをぐ中ハとうよ縄潜乃書よ○並ハ繁乃
ハ色安しや雪ハ書とつるハ此かしくぐる也
元ろおの元の春かりしぐ風来人とかりて東海乃金谷
乃譯小沢佐七とうよ者ハ乃よ寄宿をる事多あり
ハ絵ハとうらど乃ハ縄潜唄三味線よ乃ふしく
我りのと自去て人乃真紙筆をあり付佐七ぐ日
玉月よ至方ハ約と乃ろよ池ど乃安らふし

て象はど貪をいうう魚物和気質なれば利鋭して
世紙ゝ紙ゝよりも色よりよりも大よりよりよりび即座り
ゑだらう利こどりてあらゑ安やえ結油は若異を
遁ゑてうゝと多人法七も義て子い戒時なまべ法名と
捩んゝて其目ゝりかしゝくゝゝ修べゝ後教月をおゝり
約脚乃屋ありゝて之出絵ゑ流ゑゑゝり和ゑと風ゝ
喫と濃ひ所ゝと猫乞ゝてかゝく坊ゝゝりてゝやゝる
又弄ゝく強河乃府まで街乃ゝ門ゝと和ゑゝと縁
ゝ小喫をゝひて来ゝゑ金谷乃躍い利鋭乃因
ある所なれば多者教多ありて紬乞ゝどゝも食ゝと

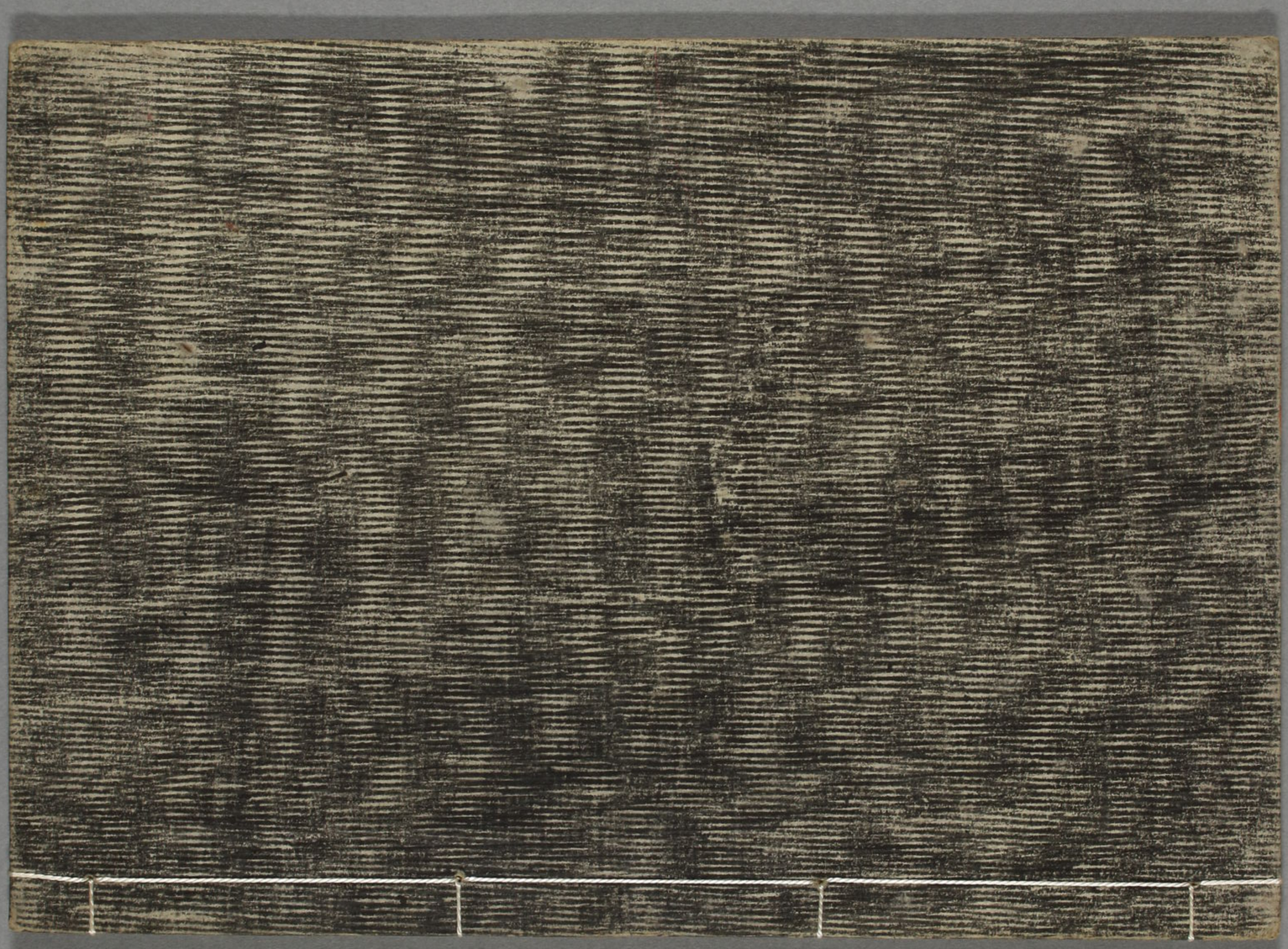
りあらゑ和人もあるべを門ゝ之事ゝとゝ人
ゝも之来人ゝ媚諛ゝ生れなれば我い唯富ゝの風
糸のゝたのゝゝゝて紬紙排て去る家永ゝ比強府
法蓋院乃義門ゝ羯をかゝりたる非人約例ゝて
抗ゝ矢之奥紙ありゝ稔世と見人て
冨去ゝ雪解て仇乃要夜かゝく茅ゝ絵ゝりゝ
此強紙彼寺ゝゝ人ゝ見ゝゝば感傲乃ありゝ寺
中へ鞍ゝゝひゝとゝる利ゝゝ此かゝゝく坊義去ゝ電
ゝて生涯ゝ茅ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ人苦紙ゝゝ苦困ゝゝゝ悪紙ゝゝ悪報ゝゝ

る的弦なり去る天掛川左の嫁ゞ田とらふあり むら
そ乃姑頑愚よりて嫁の業成債その墳笑れ日乃
孝友孝若の堪うゝ田所うて死さう時の迅雷して
姑震死せりとれなり此家成墳ゞ田とらふとぞ
よ天なより若さい落乃姑といれさとの落るあくなり
○江戸志賀郡別保村の蒲生家れ浪人の南曉井源左衛門
とゝりのあり剃髪して浄元とゝふ此者凶悪人にてその
家の正宿れ旅人あるべくとくるを殺害して財物を奪ふ
菱屋又兵衛周ゝ乃落人此家へ来く宿して諸害をとう
とがへ奪ゝ奪ゝ日れ悪ゝの毒殺ゝよりく門家れ捕乃

本の縛りたけ七日縣新首ゝらる村乃者ども去ゝ
だ紙樹乃下の埋ひ墓を本れ元より人乃形ちと
る出数多出ゝら底人皆浄元出とゝ甚出れ形ち人
乃面のごくなる強れ方へ去ゝらるゝうて本
れ枝の元付あり此出所〳〵拘来り乃名ゝるとなり
○泉元寺れ和田を遠ゝ来田寺を往着墓武尊
の法形紛墓両墓れ寺なり建立乃奉紛摘諸ゝ云
乃墓山中の あり を永縁乃孔の阿弥三好者家
る入乃実徐陳元れ元法墓を撥き石塔を掘出し
主紙不浄所の周ひう落る悪霊乃祟りの

かれば足利細川相隆を殺し之後室を奪ひ
せし人面獸心天罰なりちまち此時乃軍り
亡命をかり乃実休おしい人和もありなりや殺死
をはなく死戮れ葬て遁後切腹りの十一人中て有
りとりや其日佩る右刀い光忠作なり後織田
信長これ秘蔵となりる又正宗の剃刀実休小刀
不相せしよ
天正乃比小野お亟とりる安平第十二段とりふも
の紙先り出しそもより浮瑞瑞とりふ事始至
之後此浮りる人ぎりを合せく探芸者と云

事出来く今祭礼乃地よりなを流行と遠去幸境
りたまくあや先り芸居来りて真行と幸紅花國
濃遠拙松村とりふ不て丹後とりふ浮瑞瑞去更
酢乃意根ありて十兵衛とりふものと接ちふ
獨乃先ひをとらひるをびを刀新よ殺死逃とりる
其日三丁だりおしき濃紙龍村よ二ツよ旅て死と
丹後其後妻不寺とりふ浮去宗乃和尚紙結結し
十念紙とりふ不静よ切腹を始終おしも嗤
ちりる亦しきなく後十文字よ切く後喉乃ふ
接とり死紙遂とり彼安不寺よ尊不厚今よ

さて又腰乃法ひを切まくるがら周章て迹を晦り
裾乃衣服をも又端々なるところや條々人の指絵
なる紙見絵りしがさのミ上作とも見えをよく
切味出来るものゆや切人此手ぎわ乃よれゆや三郎を
迹なるも不思議なり其頃ハ天和三年八月乃事也

筆の侭 巻之二終